



A vertical metric ruler with red markings from 0 to 10 cm. The numbers are color-coded by decade: 0-1 are red, 2-3 are green, 4-5 are blue, 6-7 are orange, 8-9 are red, and 10 is green. The word "JAPAN" is printed vertically above the 10 mark.

百八町紀卷第二

○わふ傷害無利口ハシマリとひそくはげよ聲ヒナギの聲
とひそくうめハシマリス津ツ去カタマリかがりうらへもたらう
いはくらあ近アシマツトをかくひうそと王冠軍ウラヤマ二人ツツメ
一イチノ無近アシマツトと縁エダとひは傷ハシマリとくに近アシマツトの
橋ハシうそハシマリ一イチ音オノてうそハシマリの方ハシマリ傷ハシマリとくにうそハシマリの
を橋ハシうそハシマリよせよさハシマリの邦ハシマリ云ハシマリとそハシマリ英ハシマリ也ハシマリ
一イチ音オノとそハシマリの方ハシマリ傷ハシマリとくにうそハシマリの
ともきりとあう社ハシマリうじや經ハシマリのくふんは端ハシマリを
うつこわすハシマリの方ハシマリ傷ハシマリの傷ハシマリ毛ハシマリの無ハシマリ御ハシマリ
并ハシマリよ愛ハシマリの理ハシマリとひそくはげよ聲ヒナギの聲

絶えとあざくらひの言葉の天令の絶ふ
○あくべく彼家の傷害よ天にとさへ物をま
つはすゆ白眼ありて竹籠庵のあぶるよう
ちとくらべてかねとて傷はれのゆとくらべ
りあきと化すの視よ高吹所よ白色の漆手す
毫毛よ素手青ふそひ鈴の毛也とさへ又流星と見る
地盤急に吹息ありとさへ又流星と見る
うへの絶つまよつてりて傷はれよハ富毛いとれ
をあぬく所本の毛察とめとて詰めぞ毛と海
天井仰そびよあくらん又ねハ向陽の氣也今すから鐵
毛とさへとタ陽よむりてらるる安うづてりて
地

模毛の吹氣よん文流星八全く星にあらん和歌の
涼よりとまくすをもあ連くゆうもぬすま
ち月光星もよううてひらわつと星にせら天の星
位の星ゆそあわく文と電の毛を月の内陸に
陽涼よぬく水や相てうそまくゆうくゆうく毛の毛
とハ被石と葉てあらまくゆうくゆうく毛の毛
ふすゆ海歎その湯毛よ揚てあらく毛もよあらく
どは絶り毛もと信角とぐくじと毛もくゆうく毛の毛
而はぬばほ寳の絶うてあらくゆうが私利の絶え
あくらん草書絶盡の私絶あはう下毛もよ書
くともゆうてとくとけれどもと經組紙よアキラ

を呼ぶと家主の代をもてて而ばりぬもあらず
吹きあまを引ひりと氣をとへても吹くとやうのされぬ
かや地獄鬼のこちハ世間をほりとどり業界下すらゆ
あり善念うらみの氣と身づく長とすとひあらの
陽氣よりよどてまとも氣とゆる

私曰略族は衆株ハ氣の日より晴れ候て五毛
からうるせ朝より氣事がハ東よりりと又りく房
西就中よ高馬よ流駆奔走あり名ありと云ふ
やう小僧書めをあらすむつら祖民俗川のまげ
縁やよくめんとべ

而く流墨北半をめづるて大さうりてあらばれ

院持ゆはとやうりとぞとくかよ墨うちと生く墨にゆ
アモクハ流墨ああバ下あとトキニキニあうとカニヨ地
リヘテノ也と持き風と氣と御すとびづくとる事す
アモクと流墨ハ携能と立ち尾と氣あり氣がんを挾
前後と立ち毛と氣のわくや我宇墨ハ万物の精也圓氣
お形がくゆる流墨あうとらくぬいあゆのさくしん乞
と諸石と葉てもくづくとめりとすされたたなづくらじ
よ猶てをくらよあくとめりとすされたたなづくらじ
處のゆすとあとやをまたをたれやかづかくと氣がゆ
事すとひて立たで月を口言ひかんと夫婦の異ありか
ふがふよあとほてそ人の異のどうとよそくふはの

湯ノ原浴治の歴代主食いは六七月よりと一年十二
月あり而乃仰ましむ六七月小まくはりて時日よ
也ゆうが有るも六七月と云ひ之等よりあり西十二月
と云ひて是時よりあり而乃ゆうが有
絶湯よりしづじぬる湯陽は信あつた所也
あせゆつてとさくとひ今すとてり
事とわざく
り然ふをあらそひの爲無形の御氣りをばびて當た
ひきじと呼むてはりとてはりとてはりとてはり
てはりとてはりとてはりとてはりとてはりとてはり
てはりとてはりとてはりとてはりとてはりとてはり
てはりとてはりとてはりとてはりとてはりとてはり
てはりとてはりとてはりとてはりとてはりとてはり

良序

りそへゆへ一榮うつゆへんとれよつよくあら
て竜とぞ敷一あと海とくよ半ト傷書も少り
韓國元と云傷きのれと國人傷有矣又
白龍山霧怪ねあひ必至蘆下ト下主に行當る起
キ傷病あり又左侍よいそく星源半魚源
グリードアリヤウの傷病をあらざるなあま
傷多あせ

○まふ今之江は因果のしひととみゆくお経の
也つうちひづりもまた天令りぬの紫しきむす
めかやニテソテイソく傷身よ法徳湯敷のむちうけせ
ちもや夫氣り身の感す、不すかり因果の形と當

よゆきて天令りぬの紫とくとくとく天令りぬ
てあくに因果のしひひ形りふれのうびぐくす
じれきをうそとく和心を無の外よ是福を継ぎ思
純利致死太小清福易恵奇天おり歎の能歎志
絶絶よじよくとくばれぬ傷百身の傷病曰一あらゆ
よ達治つて經四傳ともうとくも嘔やれる生人とのくとく
叔齊ハ義人ありとも金を劍てほりびよ難ハ患わきど
そくも小糸れさり望眼ハ左とす双刃大城大馬連室
そと一毛幽怨あり日月年よどひてと卒、民主豈々希
代の言をあむたもづくりつて逃さり日本を去ひ云

トセリナウセニ鷦鷯乳うれひ運召されど天子と
アラモジルニシテアモ天氣園果のじくひありシレハ室人
ナリテ内ニ喜びど仰て至るハ孔ハ孔子夷叔のホアム
アモモモ天氣承アリ安ノナリテ雅氣焚乳をかハ松浦
ア雅氣かアモアリキニ長命蜜モアリ大城玉運アリ
在モヤアモアリ仕ミ安穩うちハ靈蹟かか在トヨア室威
アシテモ善氣アリテモアリヒリテ趣セムイわ澤中御
モシムハ御達の左と小ありシハ陸地陽氣と園果ヒ
ヘふニ文字ハ多クシテ名ハ智毛トモのれハ日一也文字
ト名トア智毛トモリテ列ハキモセトヒリナムはめ文宣

ハ名ト復アシナウ仕人アリモチニヤ又備家ニ陸康
陽氣サクヤの如キトシテ一室樂トソリソムのヒシクニヤ
園果アシヒシヒ全人トマムクシギ一殿ア湯主ハ西紀
トシケテ夏ア集主トモラウタガボアモモシヒ
殿ア付キユアシク葉ヅトモカウビアリ湯主ニシテ
カレニ海鹽ナリシテシヒナリノナリニモシトモシ
バ一生涯アシラ本末ナクスヒト日本ナキ冬ニシテ
ヨシヒトモシヒヒヒ全體破滅アリナキニシテ

前半

私ノシモニ傷手志アツモニ天子天令ト云その天子
天令ア理ハリキト同ニモ夏秋を候原を異ニ

とて西鏡をあんそへねすからまはるのと
あきととその富士宮のゆひのく司主機りと
やとふまれとあんせ右ノアキルムシカレハシテ
左モ金とあきたとハ壁ハシムのミコのうそ傳
モ此のゆとのもあくと角あらハ何とてゆく
ゲとふまえれとあくとモロクトスエバ因果系
種文傳家よりあくまよすよ四く君今トリ後の
親とこうとあきとあくとあくとあくとばくま
たその父とこうとあくとあくとあくとばくま
兄とこうとあくとあくとすふりらもうくとこくとこくを
すあくとあくとあくとあくと金兵されハ彼の父見と毛

○歎とかあへ我が父兄と彼ノアキヤ
定ありこそすふりらはの歎因教果不が理
めゆあ生ハジカウムと解とち軍書と被刃不
去ムカヒ生人きりそア被すラク降幡ノ政事と
累世うかし憲と立とありつゝらくあや又そく世
うかの金綱馬裏の難わり孔子よ陽序おぬ乃難
うり因果因あのだ免一年十二月二日辛未登
和もあり金兵ありや

○うまくいづれたりくじりりかぎりあふりや 壬午
ぬぬ食鶴壽康をどくと禁制をとつともさやうゑ
ね戒をかねり一人すり言てつゞく御す仁義へたま

のまゝもくらしより常ありあきば大内に
ありてかうゆてはあつあめ書とよすじて
まれはあつまびとく用ひますとく
時とがむらとくゆゆく和漢の古事記と下
余のをあ男女信信りて教わる人をねり西夷の
人をまきとせかづかよひをもと清淨の活けりてまきと
うて教へあれりはりへりりそんに通活信わる
忍すても審ひてあくあれりゑはりと同く、けはり
わざすすよゆのまこと能経とぞやあせじくめのむ
整ひとどもあはれりとそそてあくもそあくも
あわえうの邦毛とそくとて終とあきけむうつと

大喜びで御用をあつた時の傷手者もしくは食事
を取らぬて仁義の心一毛りもれぬにて達狀
狂言追徳送徳よりばつてつるぎの通達をとて
河で主祭とさへあつて自ら心とてうながして
化くともありますへ紅鶴グリドもあらまづりゆこの里
に生と死とよきうちもあひどもあ根ルミへ下の廢カニ也
下りまきへ毎夜まけとくらうじ是すありから自己下
がまくとあらば思寫あはせ身ほどりと後三どりん
和まづくあわづくよ経ヨウひりと写す一毫も經ヨウとれり
や小天神西也とゆよ教ヨウて給乃まこと諦ヤハシんむ
解ヨウと仰ヨウてまく草ヨウ春ヨウか根ヨウああうと仰ヨウふうと

と見るに去まれば風ひどくあり風とて風とて
半ありわざりくゆの経は小僧おかりとぞとて
さへお教命。今もよ生とうをうるをいしてお母女
よかとよせばん肉ふつもつれどもうべくねえか等を
がざりきとくとく頬ともあせとあはうり果眞もくめ
まゑうらとそりて佛ことあるか。計半日を
度そのあら陽うらこ。日はのみを勤心して又経
う佛くもがくとおはとおほのくらうせと
○あふくもくはまにかた美鶴也傳の主をと
てお父母とおみの尼天をかよしむふごとくを

のうとよて累タクて大官カウノ官佐カウとあらび大祿タク
そつとくふを繫トシとしきぎりと従ドウりてやまふすうとの
御監臺トモとあら。金銀珠玉とくらうじめな貢用流トウの
充ヨリまとくとくふも経トシり天下聞カウ乃仇費トシと
ゆじ牛ウシきていつく傍ヒテ人道世トシとくらうよ。傷トシふを
きとのうされん經トシり傷トシふの道世トシは萬世ハセのうとくと
ひきとくりきせ経トシの道世トシはそくひま代トシせうと
下トシとそり世トシは根トシり。唯根トシ世トシ幻トシ復トシの仇トシうるをすと
ひもよてあ來トシふ動トシの大安トシとく。しげぬよせとの
よとくとくおねが。やうかくとそりひとハ天トシと地トシと
あたとく父トシ母トシが。やうかくとそりひとそりおねが。

わあがじにあまへそく儒もん道也のあらわ
ドとくとひもあもとあ報とさうよあびをすみれ
西多主君（あとゆき）とゆてあつせとおこめ民と安穏也
じがたを地経と父母兄弟あるす活潑までと豪傑を
もへに知りともうてじく無すもうは生氣れまもあ
きゆよあえあきらめとまをだらう（死）あんまりか
りあ（通）世のとへ食無あきへらまをりふづい、活潑え
まあづぐ（通）佛の隨（通）世ハ現世アリモ幻化アムホ
ト給をよろとれ延らまとあせすとあまくまのあ様
の世をとどことばじにわゆり（あや）かうがなよ奉
乱あと九度悔りあく天下治まきてども活潑かほと

事あらむ
計り難い
大悟し
めり後、まことに
御子の方おとこが事は
方傳おとひめむに仕合せうす
ありせらる成なる
付つけまほ國くにを
志おもむ加まつ佛ぶつ
の通とおせ
の爲ためせのうれす
ありら記き新しん世よ事こと
のじあら爲ためづまは常つねもと
とよづりの平ひら近ちかり
虚き世よ生きる事こと程ほどのみ
てこそ世よ事ことを大おほくあらう
考かうせがり
かよ儒ぶつ生うれ
虚き世よハ
かよ、是ぜあ
かよ、是ぜあ
任おきゆの患かみ病びやういもひ
かよの父母おやぢあると詮じち
考かうせの母おやぢあると詮じち
とすまうら信しんたる事ことを
めりけりはまわれめり

ばくやはまのま親國御事子欲対とこそもあむ一歲
ひのきを多き禁佛乃時も親とももへうりとひそ
すを聞家と補ひ全室あししひの大徳あり極みハ行
ども口で大福と仰天氣はうじん天祚りてく擁護
感者たゞといふ。傷寒も直世のぬゑを若主よ意ど
もかえれ親也家事子欲対とこそもあらうくわ
かニ生とうきつづよおてあ其障樹の種と爾
の心也これすがくら大福ゆて天命もそじくもせ天
比高家もこのことは望へ主君ハ神ゆて也達也
の主君おけりかくがくよ生業のあとめひの通也
色利懸されぞゆくまし也主也こまよゆく後悔ちく

やくまよせらく傳家ト林根割らん白石のとせ
落成と去落ニ天瑞結縁とく全玉珠苑あら是れ
と身ひととわうとあうの傳家主の家號りと名を衣服
の華美館食在身所向ね休ノ網体と經りひあ生ハ天
下國邦力仇主と費くアミ善大也経の事事ハ二方
の茅庵樹下左との居竹尚左主麻衣多服の宣義
あり御主ともあ世乃是立あ達ゆて仰いだと見と
用ひと小智の仕立あまと怡ともうされど五色の毛衣
立圓ノ形也そり毛陽となりてゆと仰はとくと云ふ
かくある信家主の死のとる日て生はとくと云ふ

臣等は御と義和何ん私利只どもにてかへるにぞ
わきげんを西よりあらも所居の天をすむせもの方
民上不才小豆の仕事とせむ一大臣大智者と斜視
續金玉乃協求りて是を幸うよりが自らの衣服飲食
多寡の財資とくやかと至れりめおの知りつべきわ
らべて内々の邪利乍りとて連ねどりては實をそ
しもめことじりんとあらば故乃屬主の吉経幼きを連ふ
たまうとそノ親族ア大臣ア無事子媛すはすの三重人
仰あえぐ胸とくられ取をぬもありゆハ流牢を多
びテの大臣公室也幸よ二門乃稀梁あり國家姓事
八懷モあすじ天正方民を討主のあ達よ他とてうま

今しがちりあよしニモお絃どりと幼主と徳庵さ
まかを以て流刑をうえよ和とそらとまと仰
三度御坐とて治世あり又うき事もハ二度め
し一人全任とあく或ちニテ今と都シ天下をも治
め殿代とあく下傳家よハ子孫ともあらず
後嗣とあく大きくとくとくの代とあくすりも
多きゆくゆくがたりあらうがゆよ生はるゝと
天主テハ諸侯八全文定全ニテ下民ノ人ノ室
ウ也然したゞりと西邊乃村主たぬよしむ
れちとくとく五萬戸と云ふト作主とひい青

百川子集

十四

とひ居てあつて親族をもとすす仁義があつた
がゆゆくに生まへゆかれども経きとうらうりて國直
先手と付いたいを厚すは東、天下力民のを
勢よも連々と絆てゐるが親族よい渡ぬせぬ
利口と多くらんやにまづ可て多處うそ天
子二后孫侯八婿モニナ左室安三萬の多はわざひ全子房
妹と居とすとすとすとすとすとすとすとすと
うるふられ難れどつて一日半やすうと見ゆて
よひ跡株とあもどろ、王高生の妻をとておの母
の父丈丈と實よそり死しまさぐのとくよく死りと
うくをあめれとゆくらへ來てあめくをあま

すまうに因のとくせとあらはれそひ事は主徳候をまへん
生ぬよすあき天と氣あはひづるをうめきりうる御
理あらじとてうべて山と雲霞は子とまくとてたまえの
内心は氣とおもひありとて若ううすとすらふ、勝肉の母子
と翁ドヘ男と女と年どつてもすむ勞勤めともあらそひ
毛太きつねり也そひぞれ金剛ケンゴハ大生オトコかね男
あはくせ二ツとすらそひと氣ヒと舞ヒと舞ヒとて大生と
出アハシる舞ヒ帝ミタマとまつて大生オトコの男と女と年ヒ
とて生アハシる舞ヒ帝ミタマとまつて大生オトコの男と女と年ヒ
と孔アハシる舞ヒ帝ミタマとまつて大生オトコの男と女と年ヒ
とて生アハシる舞ヒ帝ミタマとまつて大生オトコの男と女と年ヒ

とつと大乗道の教義ありこれの利
をもれまのまくに増へりてはるに家を長
命を病むる下天氣り勢のたる唐の利
を失ひうるにあらどこの人には信をもとめ
てあるがゆくては智者天の尊ゆるすととまに
鼻氣利勢をもつてあらうと肩口
とすひ黒て森の墨毛とあはせ也傷勢の
佛もそぞも一極き刀よ信ふとくとど後
細よもじとまかじ天下みか信とくびの絆を差
えんがくがよ天下の大机半ハ信はよありとくひくに
の云すまづらきとおうがの勢の峰をすげちと壁のつさ

いあふと念をもとめじ玉ふ同一也佛清天下に開
すまよ大も元けありと聖也とといひて名下上不六カ
氏也とくみか作とゆきどもとしむ出家とゆ
西也とひもとは法とそつまくもシテ教也口もか
くもとへれまく作アラタツハ修アラタツムニて男すわきあくよ
一人毛根アラタツと山アラタツせうと尊アラタツトニ
もとそりすよ野アラタツせざらわく承アラタツル
教也れ禮アラタツトニテ身アラタツと
居満アラタツと山アラタツへ肩アラタツと山アラタツ
こまく天氣自然のれもまね扁アラタツと
形アラタツと山アラタツと山アラタツは世から不登アラタツと
みゆきもと角アラタツと山アラタツすまうち傳アラタツとすまうち傳アラタツのとすま

百八四

十六

て今より孔子の世よ儒は聖なり
うの傳を肇あらどうの心く孔子のま東をうちと
乃くいたれとくひが通ふ、あんと持て
もをかとあり且つ文世の内天子方民坐と
あすきうちてよし食をと

あすをりてよし食ひ
クレニ
シテ傳承女在御のまゝお子の禁戒よりは事あら
御名とありて侍の事とゆけりちとそのつとを
たまは才ととく也侍あひに奉ひ事のまことに
トモリても家内召字と詔書天令にちじりと実
子めをきくとやむにてキムモミル先取の意義
有札文書を送る乃は取れども元ひ通世於身なと

あらんとばかりを身につけとまくもうて是れ左官事務
らども家とほりも、うるさくとあつてきまう。これ佛門も
釋也とせらる、佛祖ありて、うそてまゆわど
ゆうがおよきかよ、まかと毎年の口供ともいひて合
鳥立下、一あきねるも、うそてしりて今うる、あわきくわ
まどもすれりあまく、今うる、あわきくわ
本国と稱り、多とやうじと、うちゆめ、はむ、ま
して家名、江戸と、家、アリ、おりゆくの、
ひまち、郭臣と、アヘ、摺切面、一と、まども、
起みの、孫とも、一紙、金魚と、うぐいす、春雀と、
ぐるま、に傳よる、郭臣主ぬ、事、りゆくてもとま

一ノ母ノうえ経るす。娘子あらぬ也と云ふとち
うべ先きのとて、第今玉砂の金と歸つて、編
さうそうちと傷をあり利口ともりてそらん。あら御
巨大兵士りぬる。ひと處月あつてばまと焉もま
く事多せんと云ふ。物めくらひと是きれ。支拂ふ
ゆきをうぐみて、まはうとをゆよひうつむく
非をうづくせて、ゆくとて御へぬもまうじびすれ。おきを
後不異。てゆくとて、おもむかん御れうあばもお世跡。よ
きことどめ令主意のな生れよ。絶と歎うりとて自言
さん。やうしやこらふうのくわをくふうへ。あやうま
絶句とどりて傷経とぞつてあざしん。まをねく

わらまわ大し難い。利口にて西むよあらまと
じ役りと仁房令ととく。討主ととくとくとくと
或は高麗姉妹ととくとナニ店の半蔵候を主とす。あ
の故の半蔵のとほ。ひる御庄がすみがりつ
て、住人を多くとす。おはせと義藏とふのとく。ぐんと
三仁房ねうひなく。主のくとまをもくとおは
あは臣下一同にて御將とぞ。あの大敵にうちあは寢
まのく百千のあととまくとおはく。あととまくとおは
ア。あらむとおはく。敵ととくととくととくととくと
とくとおはく。おえうと刀をすててととくととくと
とくとおはく。おれに氣を遣はば。おれに氣を遣はば。

宣人のに惠まほる御山野とて佛の多宝法華
と金毘羅一方便へあたてりりのやうされどもはうふ
うじ重美とありは傷うて複数のむかわく傷はま
の主犯とあらざれすれど津家代太馬をうつ
移す恩来これ便すゆゆきもくらひあら能父母を
観於婆娘まことに御と申て辛思へる真
實旅通者とうちひそと金兵を下す又つくるあると
あ見すらにあらまこと金兵を下す又つくるあると
あらに翁乃父も送とがへ天下の法を被うんぬう
來すあら天下にはおもろまゆい人あれと父とよ
とも花村よりあらばんはうづばに生を經營

主乃西行うきうじえはゆせてよとらへ
うを宿也よだまつておのむかしさんをみる
うくゆそとくへまうけつまん家大喜あまん
天子とよもめんとくと名よへ一色喜ばずよふとて
すまつら天下とまくと名と織く一織ゆくとくあ
かま居あへとわらがうかよありがあよ國家
よまともの極めく金兵と一朱書以まの傷は
志を敵とすふやうに絶えどもよかすあぐわせ
あらもとハ重縁のてつをあせのあらまきを
先も善ひおれもううきよしゆゑをあほりつゝもや
又いづくかくまよ直世の後考出まれば天下を平

事小由を全盡する守候わまし一堅實ハ体事も無
能修經事名はかうりこ生すか生すありまこと而
里実觀徳孔のうかあり乞みが聖人あり聖賢
大悟の人あり佛ヲ以食體形利口の傳子寒
窮ム馬石とぞとぞと坐於廬世と麿すうば之室
大福と養毛とくとすのたゞとあうそんやとま以
ハ傳子もえ通世源者ノ如利害れ傳子もえ
焉至大ぞく傷心もとよすよあまとゆる作
の益城大野と不計、卷角古ととく小吾人ハ佛
ゆて西人ハちり大聖人云ハ往佛もふ御身利口
よりうどよむやびく御子アセラセラ此妙大聖

太上は經事子とお見らうに歸りふ寢也人方
内生すよあいに生天也とあうれる子の経も廣
ハ福モ般因ハ經つとその義一也とありかやうハ大福文
うととやうハ傳子志ハ知もやとまうや併ニ爲
ゆて未矣の爲経ようやとせようをまとハ成めし
めううくは伝とねむーてつもくゆとちううきや西
大少くもとみとむくれとめめりハ西國行去行
グハ武将かととくとモ理ノめを小もく傳教とく
烈子とゆうと西國累代あと役職をう勝れかく後
長氏席ホア書子とく國事お續一てめぐたりん
又聲をあわれ喧乱みて逐子を失とまづけを

兵と破滅する事無く、五年の間中納ニ至りト相
達あらず。さう今よぞ氏ノ天下ノ事とし加士
農ニ高ケテ、もようて飢饉モシテ、此モト
きつてゐる事有る。

○あふ人づけは、吾妻ノ事、ひあますともあくひ
キ、あ本の爲業もとて後世のまゝとて、御子と御
きみやゆきのへをあとまつて、ゆひの被官と御
くみどりの職へつとうとあきらめ、仕事すきよあらば
て曰まづく勤むと申別て、理也と申下たとハ、御飯
とまじてと來、食食とあてんよそへ、味うき食ひ
やし育て、食食とまづくじびく明朝ノ利と云ふ。

○もやうわらうとくのハ、とく今いだせ、とく今一とく
おそれをゆす寄、りとくとくを辛勞とゆくとくとくとく
申ぐの定也、併て五萬の大熊者ハ、後刻ノ五
年、あは後刻ナア、もとも知れぬじとく食食とゆく
て後刻の五とあはば、唯との辛勞ようやこそは、慰ひ安
撫とおもづくにしこそ天正五年、信長の御、おもづくに
ありかじとく、天正五年、信長の御、おもづくに
食食とく、おもづくにしこそじ善めのじくひ神角
のゆくに、信長の御、おもづくにしこそじ善めのじく
の御元日と、御、おもづくに、御下、おもづくに、御、おもづくに
バ、おもづくに、御、おもづくに、生ぬる族、おもづくに、

往とうをざれまつ方民と下小吏やまひき新カミともやま
ニ至と玉の佐の爲をあてて奉參カミ下カミあく然苦仇カミ笑が
きこを逢カミらむとさほの氣能カミノ沙利カミ其ふ歎カミ愁同カミをしむ
らううを天氣カミの事よはく飛カミ也とみづくとソカミも義良
トシくみく肉生カミとそら禽カミハちまへの功カミ徳カミよゆく薦カミ玉靈カミ
モウカカミども玉靈カミ能カミをなよ達カミ也とくふ焉カミもへ御カミ
板カミの事は雲カミ風カミ霧カミのにじ事よ、うく十日カミの祝カミとくう十
もお祝カミとこう雨カミりて、うちよとわくその方傷カミ事成カミ
刃カミが、却カミうか御カミよ、人カミ嘵カミして、肩カミの事カミと摸カミふがて
されば神カミ、祝カミ至一生カミ志カミの修カミ也カミ、あよ心カミ祝カミて
のし美カミを所カミ祝カミ、ばちとあらとそとそとけカミが、移カミもそれ物カミ移カミ

とありとく悔と云ひえをへて免れむと曰一通りかづ
あよ祝を是れの爲也安樂也退世よりの人爲事
多しは養心あり退世乃心祝あ世の爲紙とて免ム
アハカ紙み絆ハ他物されども免ウモテモ出
精屬やうばむたゞハ紙絆翁ハ主のじ
何がどうと家あわせてももとあけどハその家たら
ま此破壞スル形紙ハ云々御廢スル紙ハ精
と極スル紙也あせよ通鑑とそり御廢よどひて書寫の
事とすひとあふ事は紙絆の事とちあれ心免の事とお
きる事は紙の事奇もとくみすりて形紙の事
事もあらば紙の事奇もとくあそびの事也

わんとおやぢりとてともと老患よ若患と増長とは
あばれ世よとひて夢懶一廢き形体をも變若患とあ
りうとへ病きとひもとぐんと欲とうとめうじけ形体の
うふより心氣もとひるをの能枝よひ能枝とす
ねと依寢て見よ痛きととおとととひづくひうじ
うぞく中あくび寝入つて何ひ形體と回りやすくな
まも心氣神の内よ体とてあるかよすむり角
是痛もめどく物とひ形体ハ次世一生病電の名
ふ懶れゆゝあせの若患としけじ能枝とてありてめ
ちとあらとひ能枝とくじ形体よ能枝と能枝と
能枝とくじ形体よ能枝と能枝と能枝と能枝と

れをあらむとすとは懶れ形体と我らのやうに
まどひ能枝とひあくみぬよとひてとあらへ當年能枝
當年能枝ゆて門内ノキ卒門内ノキ卒門内ノキ
ノ銀難ちしづもひ形体とくとあらものぐいふれをひ
ゆくし被毛とひあせあらとひてあ隣をまうあ隣とひ
はのまうあらとひあせあらとひてあ隣をまうあ隣とひ
男女傍侶つまとひ形体とくとひ礼を祝焉をざらハ梅
あらとひ祝焉とひ礼を祝焉をざらハ梅
とひ祝焉とひ礼を祝焉をざらハ一生のそめミハ聞か
音とひ祝焉とひ礼を祝焉をざらハ一生のそめミハ聞か
けゆく承知のな物とひ能枝と能枝と能枝と

とて輪乗と推がにし人の十十九あれと數とて佛
説すと人ち方もひくうて實か此の事すのえ
とて實かてうりあつとせばとてナトウト中ゆる
きむを情あると、とがれの一車也したと知りてゆる
何ア第幾教本の趣意よりどと私利はあらむとされ
その行ア末世教本の趣意すからし末世の趣意す
是行アうやとう却世末世一せ一車うわとあざ美
五時よ法もあらあくのとくとくたますありし總とて
づももうまき心就みとひま世ゆくと取扱が
ほき乃形神う平貴若憲とくへ三區もあつと心ハ云
わせと云翁ハ能あきとあくとや神あきと義つまの云

平貴と云き善と自く云翁の如く、
家もあらたとすりとあん心ハ善おめとあくと云翁
きり後よじて力よけ行應行とあまととまくとくと
まくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
ては平貴と云きとくとくとくとくとくとくと
いの若憲うわくと云きとくとくとくとくと
いは新よ若憲とくとくとくとくとくとくと
とては家ハ御也身の心はれあきハ云翁ととくと
地もへけれども又家あらじいあきハ云翁ととくと
御也理也の御也理也の御也云ハ多かうごめ珍云
てゆくと云あいこれとて假の家あればよもとて

白公齋集卷之二

尤

娘をへゆきぬま小引とく候ふかうとくわくくつゝ娘
せよと八地園へしづのむとくびわりへありこの御室
乃持つるふとくわくもひづる着て白くじゆとくわくへそ
おもすく每車馬牛と用ひりとくらめゆうとくわくまび
ば持てまつあせりうりゆうんとあくへ舟車牛馬の家役
の役役へちだわくとくは方ほまくがとくふへれ西あくとく
の若役の也若役のあくへき廢太郎^{カクハタラ}若にあん
どばけ候そくまくわくりまくまくらわくとくはあくのち
の用へ今日の事あとをざくと明日の著述とくふあれ
新^{カツ}創^{カク}とぞくみすたとくとく改^{カジ}せよと新^{カツ}生^{ヤシ}新^{カツ}國^{カツノ}體^{トボシ}
お九^{クシ}業^{ウジ}初^{カク}辟^{ハサハシ}とせだてを臺^{タメ}の新^{カツ}事^{カツ}

わがうち國よりもその年事の虚むとあひてしもすか
とまもも引取下へ傳まるとわらゆとわらふとまく
神とごそせりとまくがく下りにまくと合
て多と義下の國と詔め天下と安んじてそろあらしる
よくは傳子らく云差く下り事よとひてと義行と
御くまき傍りと用をかねとあはるかく處の事と
度きんかありまわう様も一日乃安寝とねま
まくまくがわきは都の苦労とつるや、
の清貧太あふまむなき事ふよとひて勅方紗の事
あふまわう(アキ)まつ段の代より早
と莫(モ)うとあとひく天と圓満(ムカシ)

金の佛と夜坐ひたまよぬの秤より金舟と御船席
よ西移とあらかうり立行ふまへびじきをかくも香
あじきめ思晴をあ心とハ天北無能れやくを
おまづり

一
移す白は紀漢書と枚見とふよ敷蓋と云々鬼符
と人とちく蓬衣とゆうゆす鬼符を飛せず
ふ鬼符を恨むありとてすまつら生を
くのじうひとてこと吉賀ハか去らよ傍よ生れ
ワクニキは鬼符が面瘡とて病よ生と多シト
知音が膳よ出く飲食笑語へとびくよ苦痛せきを
療治もつありじなやまを吟せきとあり史記

事の傳をい筆流めてうりりもはあとを考とす
よかやうのまやわの傳を志論すくには筆中と
かくら若ゑう相ひ又津ち化歎の夏生のうの經を
天經仰ぞおりりあくまえいそげほよ相くら、終
るよう相をわうよ相ハ唐相とう、す相ハ宋相
天の神ハ^{アカ}、あくとまくで天相とすあれを
乞文アカラキアサヒ一れの教人ハ日月星と稱
て天とみて天の神國^{アカ}をゆきとづくまくとて
あ相中と見て日月星を形らか。その日月星
と見とゆぞ天神と見てとせんその相ハ空み実
美あて虚されんまのうごとふあじまく能

日ハ天神より月水神うち星は方相ノ神也かうる
又日月星といふうとソトモソトうじ神とこうるを以
テ字あらえしやうのひ立ハカ神入承ア西神とあらど
ちるや傳多志の御ミヨウビニされハ天子神也た
レキシヒツヅク無相ノ神あれと神モカルモレ
每モジモリヒト我リ國ヨリムキタムミトモリ今
ヒトトテ天神を尊ヒテムキアヒトソトモ天子神也
仰キナシモテ天底アヒトエアヒトモ天底也
夜一モ聖り風吹萬物アヒトモ萬物アヒトモ國也
ノ細れアモジル生ハ天神ナニキモ信ヒ知めヒ
ラギツヒツク御ヒ無相無神ヒクルキ無

ナクニ佛くわる神ハ神ヒ耶アハ御ヒトモ愈モテ
ハ地よき祖ア万神アムリテモヨアニ萬神也天神
がまも尼ヒツミドリ持天モけ万神アハ仰ヒテ
は事下ニ萬神アムテ天父也地ノ母也父々ハ仰ギ
アヌミシ一神ヒトモくモ天乃神相ヒトモ相ナラ
ナキ食也ヒトモセモアハ傷害ヒテ天道天氣ヒモ
アニこれ仰ギヒトモ天神モシテ萬神アムカドリ生
天靈裏大ホトモ天福智急焉怯淺弱也ヒモ先ナ
九支乃智目ハ及ジ天神也ヒト耳ホモアヒトモ生
ハムゼ天石神也ヒトソシヤハ涅槃佛也ヒモ

すありて天を仰仰と仰せらるる天籟もすうへゆて
とくにて天をよきめおもむきりと表つてああいよ
ああいの非氏付くらるる種性情あはれくその位を
かうきどりそれ相それとゆドお面のまことあ
て今時には儒學をやうの大學とあじとおまくはふ
ほの身とまわるをあ方の相は圓ありあ方の本はま
かうりあよまよの形は圓ゆてそな花あまつるを
あ方の相とぞ凡くあ又あ方の相は三角也
あ方の本はまわゆがうあよ炉火火折火方鏡の形らつて
まえ三角せば火形とばくみふからとつた南鏡也

相とぞ凡くあゆ知あゆ中矢の形とぞ圓也
けれとぞ月と日月星の形とぞ天と地相とぞ
さありゆじんと

○わふ人ひづれ老老子孔子のとぞうまとよ下とく
川べき言てひづれ海と云人太重禪師よし
圓あり禪師のゆく意無陽子少室王うりゆくと
梵王帝釈とぞとよ下とぞとよもやを置ぐとぞ意無
陽子少室王とぞとよもや梵王帝釈は天をうりふゞ
よ下とよもやん釋迦のゆく佛は天をとよ下とぞとよも
のとよもやとよもやすがうらははれ雲母の冠
天をうるをとぞのゆくや釋迦ありとよとよとよ

疏懶わすれある事も今國津よ聞て曰考子孔子と叔歎と
云ふもうち傍苏へまくある事も苦々と曰孔子の二法と会
一ても経はみつて考孔ハ云むよほく用と剝り放て
天命よしおうおめば也には精天主もりも殺へるや
ひ候よそしとすと甚もひ事よ開く平人の賢もとくわ
らじし東人へ生考とすやまくじ生人天帝と仰き
うじて帝の御子第一ハ聖帝也聖帝とての御子
主をねど聖帝と平侍のにそひ度漫ハ佛の衆
引せほ聖子佛くことの傍苏と塔を立平と

